

共同研究 ● ジェンダー視点による「仕事」の文化人類学的研究 (2008-2011)

「仕事」と「仕事でないもの」

「仕事」とは何だろうか。

たとえば『仕事の社会学』と銘打った著作において、分析対象となる「仕事」は「収入を伴う社会活動」と明確に定義され、「収入を伴わない社会活動、たとえばボランティア活動」は「社会的に有益な活動であっても」対象から除外される(佐藤&佐藤 2004: 1)。

同様に、私たちが日常、誰かに「お仕事は何ですか」と問いかけるとき、そこで問うているのは相手の職業ないし職場であり、この文脈でいわゆる専業主婦は「仕事をしていない=無職」とみなされるのが普通だろう。その意味で、「仕事」と「仕事でないもの」の区分が雇用や経済的報酬の有無に依拠することは、現代の産業社会ではごくあたりまえの前提となっている。

とはいえ日常語としての「仕事」は、特定の属性を持つ社会の成員それぞれにとっての「しなくてはならないこと」を意味してもいる。「女の仕事は家庭を守ること」といわれるような場合がそれに当たる。ただ社会全体が仕事=有償の活動という認識に大きく傾斜している限り、家事は「本当の」「価値ある」仕事のカテゴリーからは除外され続けてしまう(アンドレ 1993: 62)。

他方、働くという事象をめぐる文化人類学的関心は、これまで主として生業活動というジャンルに注がれてきた。所与の自然環境に適応しつつ、多様な技術や戦略を駆使して生活の糧を得る活動である生業は、交換価値こそ生まないものの、生存のために必要な使用価値を生み出す労働である。そして生業活動の定義には、純粋な食糧獲得行為に加え、消費にまつわる技術的過程やそれに付随する社会関係がしばしば含まれる(岸上 2008)。大村(2008: 10)はこれを「生きた労働」と呼び、「協働や交易、政治的な駆け引きをとおして社会関係や文化を紡ぎだし、政治・経済・社会・文化が混沌と絡みあった社会的生を醸成する」ものと位置づける。だがこうした生業経済はまさに市場経済との対比において論じられることが多く、ちょうど社会学が収入に結びつかない諸活動を仕事の範疇から外したように、文化人類学的生業研究が賃金雇用労働をその射程に入れることはあまりなかったといえるだろう。

広義の労働／狭義の労働

それに対し哲学者の内山節は、もはや市場経済から独立した存在ではない日本の山村においても、収入には結びつかないが村での生活を維持するのに不可欠な、たとえば村の寄り合いへの参加、協働の山仕事や普請、家庭内でのさまざまな労働を村人たちが「仕事」と呼び、現金獲得手段としての土木労働やその他の雇用労働を「稼ぎ」と呼んで区別してきた状況をいきいきと描いている。内山は前者を「広義の労働」、後



女性職人による刺繍製作の風景(ウズベキスタン、撮影:今堀恵美)。

を「狭義の労働」とした上で、「…狭義の労働は、本来の人間の労働の世界のなかでは、そのほんの一部を形成するにすぎないはずだ。それなのに近代—現代の社会では狭義の労働だけが特別な労働化し、あるいは唯一の労働化しながら、かつての広義の労働は非労働的世界のなかに概念化されていったのではなかったか」(内山 1988: 33)と述べる。

また社会思想家の今村仁司は、古代ギリシアや中世ヨーロッパ、さらに南太平洋社会の民族誌的事例を振り返りつつ、近代的労働観の批判的検討を試みる論考の中で、18世紀中葉—19世紀中葉にヨーロッパで生じた労働表象の価値転換が労働への肯定的評価を台頭させ、労働主義の過剰展開へと結びついたと論じる。その結果、「すべての人間的諸活動は労働を範型にし、労働へと収斂して」(今村 1988: 183) いったのであり、このような労働中心主義を乗り越えるためには、共同体の生活総体の中に労働が埋め込まれていたかつての「未開社会」のように、遊戯性と結合した労働のあり方こそが重要であるという(今村 1988: 215)。

たしかに社会関係の全体の中に埋め込まれた活動としての労働のあり方、たとえばレイモンド・ファースが記述するティコピアや、D. パーキンが資本主義経済の浸透プロセスについて詳細な報告をしているケニアのギリアマ、あるいは筆者がバリ農村の事例で試みたような、儀礼をも含めた仕事・労働概念の分析は、まさに文化人類学的手法を駆使することによって、私たちの市場労働中心主義の労働観に回収されない、より豊かで多様な労働観の提示を可能にする。

だが同時に重要なのは、遊戯性と労働が結合していたとされる生業経済から市場経済への移行を単線的にとらえるべきではないということである。たとえ交換を目的とした商品生産のための労働が主流となり、労働中心主義が席卷したように見える

社会においても、社会関係の全体の中に位置づけられるような活動は、さまざまな形で残り、今なお実践されている。問題は、私たちがそれらを「仕事」「労働」のカテゴリーから排除してきたことにあるのではないだろうか。

共同研究の出発点

そこでもう一步踏み込んで、まさに市場労働、雇用・賃金労働のただなかにある人々の労働生活に、より広義の「仕事」という観点からアプローチしたらどうなるか。つまり、人々の生活世界に寄り添いながら、「仕事」とは何か、「仕事でないもの」とは何か、その境界線を定めるのは有償・無償の別にすぎないのか、それとも他にどんな要因があるのか、ジェンダーを始めとする、どのような属性や役割期待に基づいて、異なる人々が異なる範疇の仕事、あるいは仕事と仕事でないものに配置されるのかといった問題を問うてみたいと考えた。そして、産業化の度合や文化的背景の大きく異なる社会にこの問いを投げかけた成果を持ち寄った時、仕事や労働、働くことをめぐって私たちに何が見えてくるだろうか、というのがこの共同研究の出発点にある問題意識である。

そのような問題意識をふまえた上で、本共同研究は、私たちが日常において不問としがちな、近代的労働観からこぼれ落ちる諸活動に目を向け、そうした活動が行為者の生活総体にとって、あるいは社会全体にとって持つ意味を理解することを通じて現代世界における賃労働のあり方とそれに付随する諸問題を他分野とは異なる角度から照射することをめざしている。とりわけ、文化人類学ならではのアプローチが現代日本社会を含む、資本主義経済のただなかにある社会の問題とどのように切り結ぶ可能性があるかを模索し、提示する試みでもある。

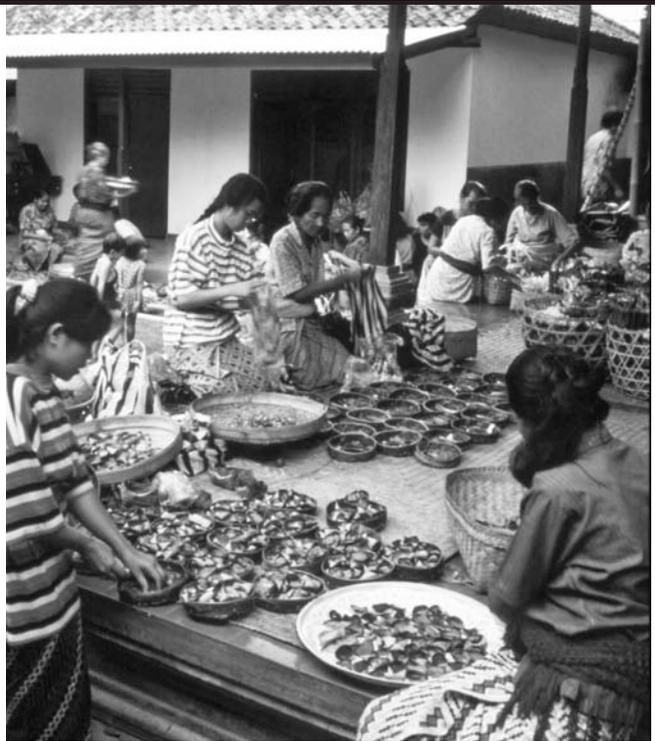
具体的には初年度である平成20年度に2回、2年目の平成21年度に4回の研究会を開催し、日本、オランダ、イタリア、ブルガリア、ウズベキスタン、マレーシア、ネパール、タイ、インドネシアをそれぞれ研究対象としてきたメンバーの報告を行ったほか、ゲスト講師として労働経済学者の熊沢誠氏、哲学者の内山節氏をお招きした。熊沢氏、内山氏からは、各々の労働研究の豊かな蓄積と思索の足跡を振り返っていただく中で、この共同研究を地に足のついたものにしていくための示唆をさまざまに受けることができた。

研究会メンバーの報告は

- (1) 研究史(ジェームズ・ロバーソン)
- (2) 「労働」「家事」概念の再考(中谷文美、宇田川妙子、松前もゆる)
- (3) 移動労働(工藤正子、嶋田ミカ、石川登、佐藤齊華、木曾恵子)



合板工場で働くインドネシア人労働者(マレーシア、サラワク州、撮影:石川登)。



儀礼の準備のための共同作業(インドネシア、バリ)。

(4) 職人(今堀恵美、関本照夫)

と緩やかなテーマごとにまとめられたが、個々の報告による問題提起やそれを受けた全体討論を通じて明らかになってきた問題群を整理すると、次のようなものになる。

- 公私の区分とジェンダーによる労働配置が重ねあわされてきた中で、家内領域が持つ社会的意味を再検討しつつ、改めて仕事・労働概念を洗い直す必要性
- 働く「場所」の移動が、個々の労働の経済的価値(報酬)と社会的価値、さらに担い手にとっての労働の意味、既存のジェンダー秩序の維持もしくは再編に対して及ぼす影響の考察
- 専門性に基づく分業を前提とする職場については近代社会のあり方への疑義

これらの論点を念頭に置きつつ、平成22年度以降もメンバーおよびゲスト講師による報告を継続し、新たな事例への取り組みをしていきたいと考えている。

【参考文献】

- アンドレ、レイ 1993『主婦：忘れられた労働者』矢木公子・黒木雅子訳、勁草書房。
今村仁司 1988『仕事』弘文堂。
内山節 1988『情景のなかの労働』有斐閣。
大村敬一 2008『労働：「生業」と「生産」がせめぎあう場』『民博通信』123：10-11。
岸上信啓 2008「文化人類学的生業論：極北地域の先住民による狩猟漁撈採集活動を中心に」『国立民族学博物館研究報告』32(4)：529-578。
佐藤博樹・佐藤厚 2004『仕事の社会学：変貌する働き方』有斐閣。

なかに あやみ

岡山大学大学院社会文化科学研究科教授。専門は文化人類学、ジェンダー論。著書に『「女の仕事」のエスノグラフィ：バリ島の布・儀礼・ジェンダー』(世界思想社 2003年)、『ジェンダー人類学を読む：地域別・テーマ別基本文献レビュー』(共編著 世界思想社 2007年)、『働くことと生きること：オランダの事例にみる『ワーク・ライフ・バランス』』(倉地克直・沢山美果子編『働くこととジェンダー』世界思想社 2008年)など。